

## 挑む

モノづくり ヒトづくり

を開発した。開発の経緯や技術的な特徴、今後の展望を聞いた。（森下晃行）

◆ 環境問題への社会的関心を背景に、排水処理技術の需要が高まっていると聞きます。

「引き合いは増えている。2020年度の業績は売上高が4億円以上に達し過去最高益を更新した。食品業界、例えば調味料、乳製品などの工場を中心に需要が伸びている」

アイエンス（大阪市西区、吉田憲史社長）が開発した排水処理装置「アクアブラスター」は、従来装置より運用コストが低く、メンテナンスの手間をかげずに排水を浄化できる。1級建築施工管理技士の吉田社長は、今から20年以上前に排水処理業界へ飛び込み、同製品



アイエンス社長

吉田 憲史氏

「散気装置の一種で、簡単に言うと金魚鉢に入れるエアポンプのようなもの。汚水を吸い上げ、かき混ぜて水中の有機物を砕く。大量の微細な泡を発生させ、酸素を好む微生物に有機物を処理させる。フィルターや化学薬品による処理に比べ消費電力が低い。長瀬産業グループの林原（岡山市北区）に導入した事例でも従来の

## 排水処理装置で欧米開拓

処理方法より電気代を削減できた。他社の処理設備は有機物に泡を付着させ浮かせて除去する『加圧浮上装置』を併用する必要があるが、条件によってアクアブラスターは加圧浮上装置なしでも導入できる」

「98年に関西の大手ホテルで排水問題の相談を受けたのがきっかけだ。ある建設業者が、化学薬品と微生物を併用した処理設備を入れていたがうまく機能せず、有毒なガスや害虫が発生し困っていた。そこで『大量の空気を水中に送り込めば微生物の働きが活発になり、解決するのでは』と考えた。日本下水道事業団が定める指針を上回る量の空気を発生させる散気装置を作ったところうまくいった」

「長瀬産業のネットワークを使い東南アジアを中心に販売を始めた。将来は欧米をターゲットにする。現在の社員は10人、うち技術者が3人だが、近く5人に増やす見通しだ」

\*取材はオンラインで実施。写真は長瀬産業提供